



50年・今昔

さいたま市浦和区「石井クリニック」

昭和47年卒 **いしい やすのり**
石井 泰憲

私達が医学部を卒業して、50年たちます。学生時代（昭和47年卒）の医療と現在まで隔世の進歩があります。

長崎大学5年生の時(52年前)、私の父(当時、長崎大学・地理学の教授)は強くなってくる右頭痛で、私の母校の大学病院に入院。最初はクモ膜下出血の疑いだったので絶対安静の治療でした。半月たっても、頭痛は日に日に悪化、意識も混濁、麻痺も出るようになり、出血がさらに進んで最悪の状態になるのかもと言われ、家族としても覚悟しました。症状が進行してくるので、さらに別の脳内血管に異常があるかもしれない可能性があり、血管造影してもらおうことにしました。当時エコー検査はAモード、Bモードしかなく、CT、MRもない時代です。セルジンガー法は確立されてなく、血管造影は頸動脈に直接針を刺していました。造影剤を頸動脈に入れ、脳内の血管を造影してもらいました。撮影後、主治医から「お父さんは変な病気ではなくてよかったね。硬膜下血腫なので、簡単な手術で回復するよ」とのこと。すぐに、穿頭術施行。血腫を洗浄して出してくれました。すると、2週間くらいで症状は改善し合併症も残らず回復し退院することができました。思い返してみると、3ヶ月前父は酔っぱらっていて、列車が駅に着き降りようとした時、デッキから落ちて頭部を打撲したことがありました。この外傷が原因のようで、静脈性出血があり硬膜内血腫ができ次第に腫大。このために、右外側から大脳を圧迫し障害がでたようです。これを除去すれば治せる疾病の可能性があるとわかり少し安心しました。その血腫を洗い出した後2週間で症状は回復。その後89歳まで健康に過ごせました。現在は、救急で頭部CTをとれば苦勞しなくて診断がつきます。

25年前になりますが、私も埼玉社会保険病院に在職中に硬膜下血腫になりました。当時は1ヶ月前での病院のスキー旅行中の頭部打撲の

件をすっかり忘れていました。しかし、たまたま“おみくじ”を引く機会があり、「凶」2回連続だったので、この頭部打撲の件を思い出しました。念のため脳外科部長にCTをとってもらいました。やっぱり心配していた通りの結果でした。思いだしてみるとアイスパーンの凸凹コブでスピードをつけたまま、凍結した氷壁で転倒して頭部打撲。このための外傷の硬膜外血腫でした。診断の翌日、穿頭術をやっていただきました。術後は苦痛なく、合併症もなく、3日目には患者さんの診察ができるくらいに元気に回復。現在も問題はありません。

同じ病気でも、父はなかなか診断がつかなくて苦しむ時期が長かったのですが、私はすぐに診断がつき苦しむことなく、治すことができました。診断医療は急速に進歩していますね。また同じ外傷性の硬膜下血腫を親子2代は奇遇と思っています。

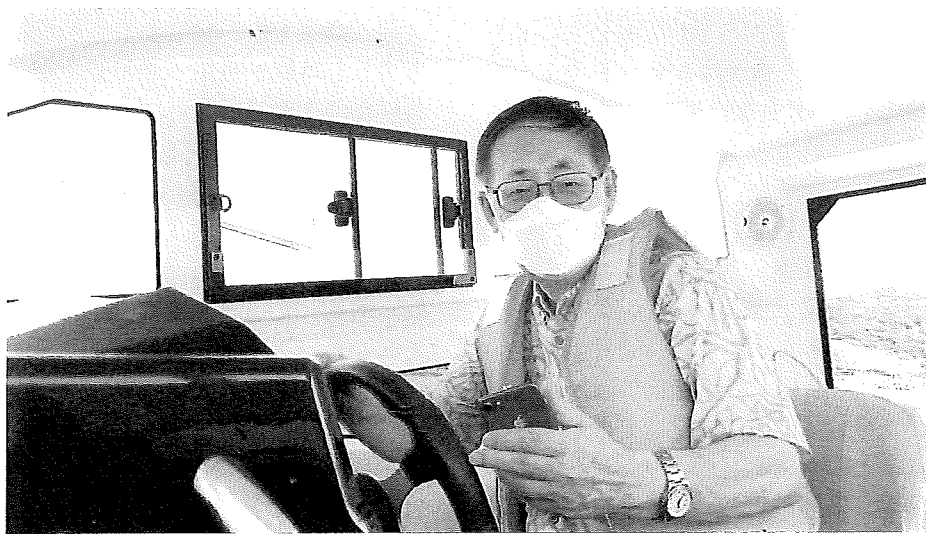
さかのぼりますが、40年前、埼玉社会保険病院に着任したころ、エコー検査が画像不鮮明で泌尿器科の画像検査は経静脈的腎盂造影しかできなかったと思います。それ以上の腎臓の画像の精査は腎動脈造影をしていました。そのころ、セルジンガー法に必要なXP装置は装備されたばかりで、放射線技師師はいましたが、放射線科の医師はいませんでした。動脈造影は必要とする医師が自分でやっていました。セルジンガー法で、股動脈を穿刺し、ガイドワイヤーを血管内に入れ、造影用のカテーテルを被せて挿入するのですが、カテーテルは、手作りです。ビニール製のチューブから作成。挿入する先端はガスバーナーで温め、引っ張って伸ばして、細くして切断し、さらにスムーズに血管壁が通過できるように先端はサウンドペーパー（紙やすり）で磨きました。カテーテルは内腔に銅線を入れて、大動脈から腎動脈にカテ先が戻して引っかかって入る形状に曲げ1晩熱水につけて曲げ加工したカテーテルを固定作成していまし

た。放射線専門医がパートに来てくれ、輸入品の造影専用のカテーテルを教えてもらうまで、2年くらい自作のカテーテルを使っていました。

今はCT、MRで細部がわかるようになり腎動脈造影も少なくなりました。着任当時の病院は放射線科、麻酔科、病理など非常勤で、現在みたいに全科の医師が十分にそろっていなかったの、造影検査、麻酔（脊椎麻酔、硬膜外麻酔など）自分たちでやるしかなかったのです（小児科の当直もやっていました）。しばらくやっていますが実施しているのを見るとなつかしく思います。（今は出来ませんが！）

最近、CT、MRなどの画像検査ができる画像センターが私のクリニックの5分くらいのところに設置されました。当日、時間外、土曜、日曜と撮影してもらえます。患者さんにも診察する方も便利になりました。読影はネットで離れた場所（研究室、別の診察室など）で専門の放射線専門医が読影して、診断報告書を早く返送してくれます。いずれ診断の大部分がAI（人工頭脳）に代わる時代になるかもしれません。

このところの画像診断の進歩は驚異的と思っている次第です。



74歳、レンタルして相模湾のクルージング